

5 学年の指導内容)

ウ 調査対象・実施時期

- 県内小学校第4・5・6学年児童
全員。

平成15年2月3日(月)～2月7日(金)

- 県内小学校第6学年約1,000人児童。
平成14年5月7日(火)～5月17日(金)実施済

エ 「調査結果報告書」の刊行(5月)

(5) 刊行物の発行及び助成

- ① 指定研究会の「研究紀要」刊行
- ② 機関誌「研究集録第39号」刊行
- ③ 学習指導改善調査研究事業「報告書」

刊行

- ④ 各都市小教研の「研究紀要」刊行助成
- (6) 各種会議の開催

- ① 評議員会：年2回(6月, 2月)
- ② 理事会：年11回(10月を除き毎月1回)
- ③ 全県地区部長会：年1回(5月)
- ④ 研究部会：必要に応じて随時
- ⑤ 研究集録編集委員会：年5回
- ⑥ 学習指導改善調査研究事業
 - 本部委員会：年2回(5月, 3月)
 - 研究推進委員会：年8回
- ⑦ 県費補助事業関係事務説明会：年1回

コ ラ ム

過去の「わかれて勉強」に学ぶ

村上市立村上小学校長 吉川 雄 次

縁あって春から母校勤めとなり、着任早々、学校の百年史をめぐった。子供のころ経験した「わかれて勉強」なるものが、今で言う習熟度別指導だったに違いないと思っていたからだ。

百年史に拠れば、本校では、23年4月から、高学年で能力別指導を開始した。「児童を学力の均質なグループに分け、能力に応じた指導を行うことによって授業を精彩あるものにし、学力の向上を図る」という目的から、4年生以上を国語・算数に限り学級を解き、学年ごとに能力別学級に編成替えした。(中略)この指導を「わかれて勉強」と名づけた。その格付けは、共通テストを頻繁に行って各グレード間の移動の機会を多くし、能力別段階の固定化を防いで学力の伸長を期した。とあり、やはり、習熟度別指導であった。また、「能力別指導研究会」がたびたび開かれ、戦後新教育推進の一翼を担ったとも記されている。

当時の子供たちの姿や保護者の声を知りたくて読み進めたが、詳細はない。ただ、この指導法が昭和32年度で終了となった理由として、次のことが挙げられていた。

- ・ 上位、下位の児童には効果的。中位の人数が70名となり、教員の労力と技術を越えた。
- ・ わかれて勉強に全職員が取り組むことで、他教科の柔軟性がなくなり、大きな陥没が出た。
- ・ 「能力別指導には賛成だが、固定学級の解体には賛成しかねる」と文部省が異論を唱えた。
- ・ 移動時の混雑や不調和な学級の雰囲気、学習の障害となった。(要約吉川)

今日、少人数や習熟度別のよさを生かした能力別指導が増えつつある。過去の成果に学ぶとともに、かつて当面した問題点を克服し、児童にとって有益な指導を実現したいものである。